

---

# 青藍執事の秘密

灯都和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青藍執事の秘密

### 【Nコード】

N2485BA

### 【作者名】

灯都和

### 【あらすじ】

「姫様。俺はあなたの願いなら、なんだって叶えます」かつてあらゆる小国を攻め滅ぼした、「鬼の国」とも云われる過激な国ベルリガ帝国。そんなベルリガ帝国の姫君 エティシラが16回目の誕生日を迎えた時、彼女のもとに“新しい執事”がやって来た。「本日から、あなたにお仕えさせて頂く”執事”でございます」そう言って微笑む青眼の男ラオヴァルトは、ある秘密を抱えていて。

## 第一話（前書き）

タイトルは「せいらんしつじのひみつ」と読みます。

## 第一話

まだまだ春には程遠い、二月三日。凍てつくような寒さのこの日、ベルリガ帝国の宮廷は一段と賑わっていた。

特に、国王ダーフィットと王妃コスタの高揚ぶりは相当のものであった。

それもそのはずだ。

今日はただ一人の子供である姫君エティシラの、16回目の誕生日なのだから。

「エティシラももう15歳とはなあ！」

グラスに注いだワインを一気に飲み干し、父が言った。

何百人もの使用人がずらりと並んだ大広間では、エティシラの誕生日パーティーが行われていた。

薔薇の紋様が施された正方形のテーブルを囲む、臙脂色えんじの大きいソファが四つ。

国王家族はその中の三つに、贅沢にも一人ずつ腰掛けている。

「ちよっとお父様、間違えないでよ。わたしは今日16歳になったのよ」

いつものものより少し値が張る桃色のドレスを纏った姫、エティシラは、真剣な表情で父に抗議するが、すっかりほろ酔い気味の父は「すまんすまん」と赤い顔で呑気に笑い出した。

今回の誕生日パーティーは、エティシラ本人の希望ではなく、娘を溺愛する両親が催したものだ。余計な金がかかるから……とエティシラは遠慮したのだが、半ば強引に催された。

溢れんばかりの愛情を注いでくれるのはとても嬉しいのだが、正直なところ早く終わってほしかった。

つい先程まで、自分の誕生日を祝うべく宮廷を訪れてくれた様々

な客人の対応に追われっぱなしだったエティシラは、もうすっかり疲れきっている。

だから、休みたかったのに　このパーティーが終わらない限り、エティシラは休むことができない。

パーティーが終わって部屋に戻ったら、すぐにブルーノに愚痴をこぼそう……。

エティシラは大広間を見渡し、ブルーノの姿を捜す。

“ブルーノ”ことブルーノ＝デリウスは初老の男性で、エティシラの執事だった。

温和な性格のブルーノは、どんなワガママだって聞き入れてくれる。エティシラにとっては祖父のような存在だ。

「……あれ？」

だが、かなり入念に捜しても、ブルーノの姿はどこにも無かった。

おかしいな、とエティシラは目を凝らして再び大広間を見渡すが、やはり彼は見当たらない。

「ブルーノは？」

誰に対してでもなくぽつりと呟くと、彼女の母が平然な顔で答えた。

「ブルーノなら、本日付けであなたの執事を辞めたけれど」

「辞めた!？」

勢い良くソファから立ち上がり、エティシラは思わず声を荒げる。

「ええ、辞めたのよ。奥さんが病気にかかってしまったらしいわ。

だから、執事を辞めて奥さんの看病に努めるんですって」

「そんな……」

淡々と事実を述べる母に反して、エティシラはかなり落ち込んでいた。

ずっと、昔から。

少なくとも物心がついた頃には傍にいて、いつも自分の面倒を見

てくれたブルーノ。

両親には言えないようなことも彼になら話せた。相談にもたくさん乗ってくれた。悪戯いたずらだつて数えきれないほどしてきたが、ブルーノは「姫としてあるまじき行為ですよ」説教をする代わりに両親には黙っていてくれた。

彼は執事であると同時に、一番の理解者だつたのだ。

それなのに 何も言わずに、自分のもとから去って行ってしまふなんて。

「……あんまりじゃない。わたしに、一言くらい言ってくれたって良かったのに……。ひどいわよ」

ブルーノと数々の思い出を胸に、エティシラはややくきつく唇を噛み締めた。

「仕方ないさ。きつとお前に言つたら、絶対に引き止められると思つたのだろう。それに、余計に別れが辛くなるからな」

少し酔いが覚めてきた様子の父が、エティシラを宥なだめる。

「まあ、安心しなさい。ちゃんと“代わり”は用意してあるからな  
「代わり？」

父の言葉を暗唱して首を傾げたのと、大きな扉がギイイ……と音を立てて卒然と開いたのは 同時だつた。

エティシラは父の返事を待たずに、少し遠い扉の方へと視線を移す。

よく晴れた青空の上に、海の藍色を被せたような青藍色せいらんだつた。

距離があつてもよく見える、開いた扉のもとに佇立する男の瞳は。

「姫様」

聞く者を陶醉させてしまふような、透明感のある声で男は言った。

身に纏った燕尾服えんびふくと同じ、黒色の革靴で高級フローリングの床を歩き、呆然としているエティシラの元へゆっくりと近づいてゆく。サファイアの宝石のように美しい青藍色の瞳は、近くで見るとより一層美しく思えた。

黒い髪に、黒い服装。全身を黒一色で包んでいるからこそ、その青い瞳の美しさが余計に際立つのだ。

男は靱しなやかな動きで屈みこみ、その青眼でエティシラをまっすぐに見上げる。

「だ……誰……？」

よつやくエティシラの口から放たれた問いに、「お目にかかれて光栄です」と男はふつと微笑む。

「俺はラオヴァルト＝デリウスと言います。本日から、あなたにお仕えさせて頂く”執事”でございます」

そのまま彼女の手を取り、ゆっくりと優しいキスを落とした。

## 第二話

午後九時を過ぎた頃、エティシラの誕生日パーティーは終わり、主役の姫はくたくたになって部屋へと戻ってきた。

チュールレースをあしらった大きな純白のベッドに、抱きつくように飛び込む。

「ああ疲れた。このパンプスね、18cmもヒールがあつてもんのがすんごく足が痛いよ。それなのに、お父様が履けつて云うから履いてあげたの」

ドレスと同じ桃色のパンプスをぶんぶんと上下に振り、エティシラは愚痴をこぼした。

「女性靴の云々は、男の俺にはよく分かりませんが……すごく痛かったんでしよう？ よく頑張りましたね」

「そうよ。わたし頑張ったのよ、ブルー……」

ブルーノ、と言いかけてはつとずる。

もうブルーノはいないのだ。

「姫様。俺はブルーノではなくラオヴァルトです」  
代わりに目の前に居るのは 苦笑しつつパンプスに手を添える、もつとずつと若い執事だった。

小さい布でエナメル素材のパンプスを入念に磨きこんで、右足の方だけを脱がせた。

続いてラオヴァルトは、左足のパンプスを磨きこむ作業に集中し始める。

「そ、そうだったわね」

「ごほん、とわざとらしく咳払いをして、エティシラは腕を組む。

「とにかくね、わたし、こんなんでも一日中我慢してたんだから！」

「そうですか」

「そうよっ」



「……」  
「……」

妙な沈黙が流れ、エティシラは黙々と靴磨きに精を出している執事を見下ろす。

ラオヴァルト「デリウス。

彼はその姓が表すように、ブルーノの孫息子だった。

ラオヴァルトはエティシラの世話をブルーノから託され、彼の代わりの「新しい執事」としてエティシラの元へやって来た。

エティシラはラオヴァルトとはまったくの初対面である。けれど、ブルーノの孫と云うだけで一抹の安心感を覚えてしまうのだから不思議だ。

「それにしても、あまり似ていないのね。ブルーノと」

エティシラの言葉に、ラオヴァルトの青藍色の瞳が僅かに揺らぐ。

「よく言われます。俺、母方の血を強く受け継いでいるみたいで」

ブルーノと云えば、白髪混じりの頭髮に濃緑色の瞳のどこにもいるような老人だ。

決して整った顔立ちとは云えないし、若いころだってそう美男子だった訳ではないだろう。

けれど孫のラオヴァルトは、どこかの役者のように凜たたくとしていた佇まいで、整った容姿をしている。とてもブルーノの孫とは思えない。

ここで、ひとつの疑問がエティシラの頭を擡もたげる。

同じ血が流れているはずなのに、似ても似つかない外見のブルーノとラオヴァルト。

それなら、内面は 性格はどうなのか。

「ねえラオヴァルト、ちょっと頼みがあるのだけれど。聞いてくれる？」

ちょうどラオヴァルトが靴磨きを終えたところで、エティシラは

試すように言った。

「姫様のお願いでしたら、なんでも聞きますよ」

ラオヴァルトは先刻のように柔らかく微笑む。

快く受け入れてくれるあたり、彼もブルーノ同様優しい性格なのかもしれない。

「あのね。この後、九時半から歴史のお勉強の時間なんだけど

今日はものすごく疲れているから、サボ……休みたいのよ。だからラオヴァルト、アニ先生が来たら“エティシラは高熱のため今日は休みます”って言うておいてちょうだい。も、もちろん面倒だからって訳じゃないのよ？」

そう油断して、ぺらぺらと喋ってしまったのが間違いだった。

「いやです。祖父から授かったデータを見るに、姫様はいつも何かと理由をつけては勉強を怠<sup>おこた</sup>っているようですね。俺は知能レベルの低い姫様を放<sup>はな</sup>つて置くことはできません。寝言は寝てから言うてください」

ラオヴァルトは一切の迷いもなく、すらすらと言葉を紡いだ。

一体どこからそんなに豊富な言葉が湧いて出るのだろう、と感心してしまうほどに多弁だ。

「わ、私の頼みを聞いてくれるって言ったじゃないっ！」

エティシラは饒舌な執事を、びっ！と指差す。

「聞くとは言いましたけど、頼みを引き受けるとは言うていませんよ？」

「~~~~っ」

「祖父はいつも姫様が勉強を怠<sup>おこ</sup>るのを見逃してあげていたようですが、俺はあなたを見逃しませんので。暖かいハーブティーを用意しておきますから、ちゃんと勉強してきてください」

ラオヴァルトは依然、浮かべた微笑みを崩さないままだ。

……ラオヴァルトもブルーノのように優しい、なんて一瞬でも思った自分が馬鹿だったらしい。

とんでもない曲者だ。知能レベルが低いとまで言われた。

それでもどうにかして勉強から逃げたかったエティシラは、どうしようか としばし思い悩む。

「エティシラ様！」

しかし、勉強の世界へ誘う使者は乱暴にドアを開いてやってきてしまった。

「アニ先生……」

「おっと！ 今日には仮病を使わずに、ちゃんとお部屋で待っていたのね。えらいえらい！ さ、勉強をしに行きましょう」

かつちりとしたスーツを身につけている、アニ先生と呼ばれた中年の女性は、エティシラの手をぐいぐいと引つ張って廊下へ連れ出す。

この部屋から少し離れた場所にある、図書室へと連れて行くつもりなのだ。

「い、嫌！」

エティシラは助けを求めるようにラオヴァルトに視線を投げるが、彼に動き出す気配はない。

「まあまあ。姫として、ある程度の教養を身につけておくのは大事なことですよ」

「ちよつとつ、助けてよラオヴァルト！！」

「　　　　　いつてらっしゃいませ、エティシラ様」

ラオヴァルトは姫の嘆願を涼やかな表情で受け流し、ドアが閉まるまで頭を下げていた。

### 第三話

「今日は姫様の誕生日だから、私もはりきってお教えしないかね！」  
意気揚々とした様子のアニに引つ張られる形で、エティシラはペ  
ルシヤ絨毯の敷かれた長い廊下をとぼとぼと歩いていた。

「……アニ先生、私やっぱり嫌だわ」

「いえ、今日という今日はちゃんとお勉強してもらいますよ」  
ぼつりと呟けば、アニ先生ことアニにすかさず返されてしまう。  
勉強なんかしたくなかった。

訳がわからないし、教本の最初の三行を読んだだけで眠くなる。  
いつも勉強を怠ってばかりいたけれど、ブルーノはそれを見逃し  
てくれた。勉強よりも、優雅なダンスや歌を極めて欲しかったらし  
い。

けれど、ラオヴァルトは見逃してはくれなかった。

『暖かいハーブティーを用意しておきますから、ちゃんとお勉強し  
てきてください』

先刻のラオヴァルトの言葉が、ふとエティシラの脳内で再生され  
る。

……ハーブティーなんか、絶対飲んでやらないんだから。

ラオヴァルトへの小さな仕返しを心に決めて、エティシラは図書  
室へと入っていた。

充滿している古びた本の匂いは、決して良い匂いとは言えないけ  
れど不思議と心が安らぐ。

図書室へ一歩踏み出したかと思うと、アニが思い出したように「  
あ」と声を漏らした。

「資料を部屋に置いてきちやったわ。取ってくるから、ちょっと待  
っていてくださいね」

スーツの袖を腕まくりすると、アニはそそくさと早足で図書室か

ら出てゆく。

「……」

一人残されたエティシラは、暇を持って余してふらふらと図書室の中を彷徨い、本棚一つ一つに視線を投げる。

何か面白い絵本があれば良かったけれど、備えられているのは難しい本ばかりだった。なにかの図鑑とか、伝記とか、用語集とか。

そんな中でエティシラは、一つの歴史本を見つけた。

なめらかな字体で“我が国 ベルリガ帝国の歴史”と表紙に大きく書かれたその本のページを、エティシラは何となしにぱらぱらとめくる。

主な内容は、七十年ほど前の近代のベルリガ帝国についてだった。その頃のベルリガ帝国は、とても過激だった。

頻繁に戦争をしては、周りにあった小さな国々を滅ぼしていったのだ。

だからその名残で、ベルリガ帝国は今でも他国からは「鬼の国」なんて云われている。

今のこの国はとても穏やかで、治安も良く独自の文化を築いているけれど 戦争が終わってから、まだあまり時は経っていない。

いつまた戦争が始まっても、おかしくないのかもしれない。

「レイホルム帝国？」

エティシラは無意識のうちに呟いていた。

ずらりと並んだこの国に滅ぼされた国のリストの最後尾に、“レイホルム帝国”と綴られていた。

どうやらレイホルム帝国は本当について最近まで存在していた国で、美しく栄えていた国だったらしい。

少なくとも太字で強調されているくらいには、立派な国だったのだらう。

「エティシラ様、お待たせしました！」

すっかり歴史本を熟読していると、背後で声が響いた。

見れば、何冊もの資料を抱えたアニが息を切らしながら室内へ入って来ているところだった。

「ああ、重かった。肩が悲鳴を上げてるわ」

アニは抱えていた資料をテーブルの上に置き、疲れたように肩を叩く。

「それより姫様、今歴史本をお読みでしたね。えらいわねえ、私がないときもちゃんと勉強なさって」

「べ、別に勉強してたんじゃなくて、暇だったからちよつと読んでただけよ」

エティシラは開いていた歴史本を本棚に戻し、「で？」と訪ねた。

「今日は何時間くらいで終わるの？」

「そうですねえ、ざつと四時間くらい」

「四時間！？ よ、四時間も難しい本とにらめっこしてろって言うの！？」

「しょうがないでしょ、姫様ったらここ一ヶ月勉強を怠り続けていたんだから。やることはいっっぱい溜まってるんですよ」

嘆くエティシラを軽くあしらひ、アニはテーブルの上の資料を丁寧に並べる。

エティシラは、早くも精神的苦痛を覚え始めていた。

四時間どころか五時間に渡る勉強はようやく終わり、エティシラは眠い目を擦りながら再び歩いていった。

地獄のような時間だった。

訳のわからない単語やら人名を頭に叩きこまれ、何度も暗唱させ

られ。

日付が変わってしまった午前二時。宮廷内は、すっかり静まり返っていた。

ハーブティーを用意しておくと言っていたあの執事も、もう待ちくたびれて眠ってしまっている頃だろう。

「姫様、おかえりなさいませ」

しかしその予想に反して、ラオヴァルトは部屋で待っていた。

五時間前に見送った時のように、緩やかな動きで頭を下げてエティシラを迎え入れる。

「こんな時間まで待っていたの？」

驚いで目を開くエティシラに、ラオヴァルトはふっと笑った。

「だって言ったでしょう、暖かいハーブティーを用意しておくって」  
ラオヴァルトはミニテーブルへ置いたティーカップへと、慣れた手つきでハーブティーを注ぐ。

「さあ、どうぞ。今晚は寒いですから、きっと身体が暖まりますよ」  
エティシラはミニテーブルの前の椅子に誘導され、促されるままそこに腰をかけたのだが、依然ティーカップを受け取るうとはしなかった。

勉強する前、絶対にハーブティーなんか飲んでやらない　と決意したのだから。

それでも確かに身体は冷えているし、何よりラオヴァルトの淹れたハーブティーはとても美味しそうだったのでつい心が揺らいでしまう。

「飲んでくれませんか……？」

そして、ラオヴァルトが悲しげな表情を浮かべたときには、ついに根負けしてしまった。

「の、飲むわよ！　飲んであげる！」

やや乱暴にティーカップを取り、エティシラはハーブティーを飲み始める。

少し熱かったが、猫舌ではないのでこれくらいがちょうどよかった。

「いかがですか？」

「……………その……………まあ、まずくはないんじゃない」

「それは良かったです」

ラオヴァルトは嬉しそうにエティシラを見つめる。

エティシラはじっと見つめられている手前、なんだか飲みにくくもあつたのだが少しずつハーブティーを飲んでいった。

それから十分ほどが経ったとき、エティシラがこてんとミニテーブルの上に項垂れた。

ティーカップは、空になって彼女の隣に置かれている。

「姫様？」

静かな声でラオヴァルトは彼女の表情を伺うが、案の定エティシラは眠りの世界へ行ってしまっていた。

「眠ってしまいましたか」

ラオヴァルトはエティシラを抱きかかえて、ベッドへと優しく下ろす。

「姫様。お勉強、お疲れ様でした」

熟睡している彼女に毛布をかけると、そっとささやいて部屋の照明を消した。



## 第四話

その日のエティシラの部屋には、正方形のテーブルに、一対一で向かい合うエティシラとラオヴァルトの姿があった。

もう随分と長い間、部屋にこもりつきりでこうして向き合っている。

「そろそろ降参してはどうですか？」

目の前の執事が、憎たらしい微笑みを浮かべた。

それでもエティシラは頑かたくなに首を振り、「もう一回！」と再び対戦を願う出る。

しかし、待ち受ける結果はやはり同じものだった。

「……また負けたわ」

エティシラははあ、と自嘲的に溜息をつく。

「だから、そろそろ降参してはどうですかと言ったんです。もう終わりにしませんか……というか、これで終わりにさせてください。俺もそろそろ飽きてきました」

ラオヴァルトはついに立ち上がり、一方的にゲームを止めてしまった。

「なにそれ、わたしが弱すぎるって言いたいのか？ ラオヴァルトが異常に強いだけでしょう」

「いえ、俺はそんなに強くありませんよ。姫様が弱いんです」

「なにやもう！ せめて、もっとオブラートに包むとかしてくれただっていいじゃないっ！」

やや不機嫌になったエティシラは頬を膨らませる。

ラオヴァルトは「ごめんなさい、姫様」と苦笑していた。

暇を持って余して、軽い気持ちでラオヴァルトとチェスを始めたのがいけなかった。

自分が弱すぎるのかラオヴァルトが異常に強いのか、エティシラ

はことごとく連敗した。

何度対戦しても、立て続けに負けてしまう。

「もうチェスはいいわ。他のことをしましろう」

テーブルの上に広げられたチェスの道具類を片付けると、エティシラもラオヴァルト同様立ち上がった。

「お勉強でもなさったらいかがですか」

「絶対いや」

ラオヴァルトに素早く返し、エティシラは宛もなく窓の外を見下ろした。

二階に位置するエティシラの部屋の窓からは、この宮廷の玄関前がよく見える。

世界各国のあらゆる花を集めたその玄関前は、鮮やかでとても美しい。

「……ん？」

そこに見慣れた人影が二つ現れて、エティシラは前のめりになる。

「姫様、落ちますよ」

エティシラの隣へと寄り、ラオヴァルトは彼女に警告する。

「そんなことよりラオヴァルト、あれ見て！ お父様とお母様だわ」

「え？」

エティシラの指差す先には、たしかに彼女の父と母の姿があった。どこかへ行くつもりらしく、一段と煌びやかな衣類に身を包んでいる。

「二人共お出かけみたいね。ねえラオヴァルト、お父様たち何か言ってた？」

「いえ、特に何も……」

「一体どこへ行くのかしら。お父様たちに聞いてこないと」

エティシラは顔を上げると、早足で部屋を出た。

ドレスの裾を持ち上げながら長い階段を下り、玄関前へ急ぐ。

ラオヴァルトもその後を追った。

「お父様、お母様！」

玄関の扉を開けて外へ駆け出すと、今まさに馬車に乗り込もうとしている父と母が驚いたように振り返った。

「エティシラ。どうしたんだい、そんなに息を切らして」

「お父様たち、どこかへ行くみたいだったから……。どこに行くつもりなのか、聞こうと思って」

肩で息をしながら、エティシラはなんとか父へと言葉を紡ぐ。

「あらやだ、言っただけじゃなかった？」

母は口元に手を添えると、「あのね」と前置きして話し始めた。

「私たちはこれから、ブレターニッツ公爵の家へ行くの。明日の朝になったら帰るわ」

「あ、そうなの？ ……って、明日？」

「そうよ。今晚は公爵の家に泊まるから」

母の言葉を受けて、エティシラは俯いて頭の中を整理し始める。

お父様とお母様は、今晚お泊りしに行く。

明日まで帰ってこない。

それは、つまり。

「……！」

エティシラはぱつと顔を上げて、声を張った。

「そ、それって、明日の朝までラオヴァルトと二人きりってことじゃない！」

完全な二人きりというわけではない。

使用人は何人もいるし、その他にも専属のシェフや先生が住んでいる。

だが、姫の世話のほぼ全般は執事がこなしているのだから 実質、ラオヴァルトとずっと二人で過ごすようなものだ。

「まあまあ、いいじゃないか。若い物同士仲良くしてたらいいさ」  
呑気な父を、エティシラは必死で指摘する。

「何言ってるのよ、お父様！ わたしも連れて行ってちょうだい」  
「ははは、ごめんなあエティシラ。公爵家ではワインパーティーをするんだ、それにはお前を連れていけない」  
たしかに未成年のエティシラは酒を飲めないのだから、行くことはできないけれど。

「……………よからぬことが起こったら、どうするつもりよっ」

エティシラは小さな声で、ぼそつと呟く。

その声を聞き逃さなかったラオヴァルトは、妖しげに微笑むと、彼女の耳元で囁いた。

「……………何かよからぬことが起こってほしいんですか？ 姫様」  
僅かに目を細めてもなお、その青藍色の瞳はぎらりと美しく輝いている。

「……………そんな訳ないでしょ、馬鹿執事！」

顔を真っ赤にして、エティシラはラオヴァルトをどつく。  
しかしこうしている間に、父と母はそそくさと馬車に乗り込んでいた。

「あ、ちょ、待ってよお父様！ お母様！」

焦って声を上げたが、馬車はあえなく発車してしまった。

「それじゃあな！ ラオヴァルト、エティシラを頼むぞー」

馬車の中から、父の明るい声が聞こえてくる。

「かしこまりました」

ラオヴァルトはそう言っただけで頭を下げると、馬車が完全に見えなくなった頃になって顔を上げた。

そして、隣でたじろいでいるエティシラに視線を投げる。

「明日の朝までよろしくお願いします、姫様」

「よろしくなくていいわよ！！」

エティシラは大きく言い放つと、ラオヴァルトに背を向けて部屋を目指し駆けだした。

## 第五話

力いっぱいドアを閉めた衝動で、クローゼットの上に飾っていたウサギのぬいぐるみが床に落ちた。

けれどエティシラはそれを拾い上げる気にもならず 逃げこむようにやってきた自室で、うるさい鼓動を刻む胸をぎゅっと押さえつけていた。

お父様もお母様も、一体何を考えているのかしら。

夜が明けるまで、娘を若い執事と二人きりにするだなんて。

「……心臓が、持たないじゃない……」

小さく呟いたところで、ドアがおもむろにノックされた。

「姫様、夕食をお持ちしました」

そのドアの向こうからは、ラオヴァルトの普段と何ら変わらない涼やかな声が聞こえる。

「は……入っていいわよ」

なぜか変に緊張してしまい、エティシラは一呼吸置いてから言った。

普段夕食は父と母と一緒に摂っているが、今日は二人共出かけてしまったので一人で食べる。

エティシラはテーブルの前の椅子に腰掛け、着々と食事をテーブルの上に並べていくラオヴァルトの表情をじっと見つめる。

苛立ちいらだちを覚えてしまうほど冷静だ。

「……ねえ」

「はい」

「め、命令よ」

フォークの刃先をラオヴァルトに向けて、彼を精一杯睨みつける。

「今日は、半径五メートル以内に近づかないでちょうだい」

もちろん、「心臓がもたないから」とか「何かよからぬことが起

こつたら困るから」とか、理由までは詳しく言わなかった。

「……姫様のご命令ですから、聞き入れない訳にはいきませんね」  
ラオヴァルトは従順に、エティシラから五メートル以上離れる。  
理由を聞いてこない彼は、もしかしたら全部わかっているのかもしれない。

「それでは、失礼します」

そして優雅な笑みを浮かべたまま小さく頭を下げると、ラオヴァルトは部屋を出ていった。

「……いただきます」

広い部屋に一人になったエティシラは、浮かない表情で食事を始める。

いつもなら父や母と話しながら楽しい食事を摂っているけれど、今日は一人ぼっちなので退屈だった。

誰か ラオヴァルトとでも一緒に食事を摂っていれば、退屈しやなかったかしら。

ふとそんなことを考えて、エティシラはすぐに首を左右に振った。  
あの執事は危険だ、と。

半径五メートル以内に近づくなと言ったのも自分だ。

突然と聞こえてきた激しい雨音に、エティシラは窓の外へ視線を投げる。

少し霧がかっている、濃紺の空。

外では、城をも打ちつける大雨が降り始めていた。

日付が変わる少し前になった頃には、外の天気は大雨から嵐へと

変化していた。

鋭い刃のように、容赦無く降りしきる雨。

穏やかだった木々たちを、激しく揺らす風。

ひどく騒がしい夜だった。

「……………」

窓はたしかに閉めているはずなのに、激しい雨と風の音は室内まで入り込んでくる。

おまけに雷まで鳴り始め、エティシラはびくびくとベッドの上で震えていた。

「姫様、そろそろお休みの時間です」

夕食前の時ぶりに、ラオヴァルトがエティシラの部屋を訪れた。

寝る前の挨拶をしに来たらしい。

普段なら丁寧な毛布までかけてくれるのだが、今日は命令通りに半径五メートルほど離れた位置で頭を下げている。

「それでは、おやすみなさいませ」

「ひっ……………」

突然ラオヴァルトによって部屋の照明を落とされ、エティシラは肩をびくっと上げる。

ラオヴァルトはそのまま部屋を出てしまったらしく、暗闇の中でドアの閉まる音が響いた。

こんなに壊滅的な天気である上に、真っ暗な中で一人ぼっちにされたエティシラの心は大きな恐怖に包まれていた。

大雨も大風も嫌い。

中でも取り分け、雷は苦手だった。

「いやーっ！！！」

なので 窓の外で雷がピカッと光った時、エティシラは耳を塞いで声を上げた。

怖い。

こんな中で、眠れるはずもない。

その瞳にはうつすらと涙も浮かび、身体は相変わらず小刻みに震えている。

「姫様？」

そのとき、真つ暗だった部屋がぱつと明るくなった。

「っ……！」

露わになった室内には、様子を見に来たらしいラオヴァルトの姿がある。どうやら、彼が照明をつけたらしい。

「どうかなさいましたか？ 今、ただならぬ悲鳴が聞こえてきたのですが」

珍しく心配そうな表情をしている彼は、こんな時でもしつかり半径五メートル以上離れた場所に立っていた。

「……ラオヴァルトッ」

エティシラは縋るように執事の名を呟くと、涙を流して彼の元へ駆け寄った。

そのまま、何のためらいもなくラオヴァルトに強くしがみつく。あまりの強さに、エティシラはラオヴァルトを巻き込んで床の上に倒れこんでしまった。

「痛いです」

下敷きにされた状態のラオヴァルトが苦笑いする。

床に、厚い素材のカーペットを敷いてあったのが幸いだった。

「半径五メートル以内に近づくなと俺に言ったのは、姫様ですよ」  
呆れたような口調で言いながらも、ラオヴァルトは彼女を拒絶することはなく優しく微笑んでいた。

「……うるさいわね、怖いのよっ！」

なんとかして凜とした声を放ちたかったけれど、エティシラはどうしても涙声になってしまう。

「 エティシラ姫様」

優しく囁いて、ラオヴァルトは自分の胸に顔を埋める姫を強く抱



きしめた。

「どうぞ、ご命令を。……俺にどうして欲しいんですか？」

「……………」

エティシラは一度躊躇ためらった後、意を消して小声で言った。

「わたしが眠るまでは……………そばにいて」

「分かりました」

小さく頷いた後、ラオヴァルトは独り言のようにぼそつと呟いた。

「何もしないと云う保証はできませんけど、それでも良いなら」

「!?!」

敏感に反応したエティシラに、ラオヴァルトはその微笑みを、心の底から面白がっているような笑いに変えた。

「冗談ですよ。俺は執事として、あなたにこれ以上のことはしません。絶対に」

あやすような言葉と同時に、ラオヴァルトはエティシラを抱きしめる力をさらに強くした。

「……………あなたが落ち着くまで、ずっとこうしています。俺が付いています。だから、どうか安心してお眠りください」

そして、片手でエティシラの頭をそつと撫でる。

こうして、嵐の夜は少しずつ更けていった。

## 第六話

午前七時半。

エティシラはいつもラオヴァルトに起こされている時刻より、三十分早く目を覚ました。

まっすぐに差し込んでくる、朝の日差しが眩しい。

眠い目を開いて窓の外を伺うと、昨夜の大嵐が嘘のように静かな風景がそこにはあった。

淡水色の空はどこまでも澄んでおり、昨日は身を潜めていたのであろう小鳥たちも元気に囀なえずっている。

「……？」

と、ここでエティシラは、いつものように純白のベッドで寝ていたことに気づく。

毛布までちゃんとかけられていた。

昨日は、ラオヴァルトにしがみついてそのまま床で眠ってしまったはずだ。

恐らくラオヴァルトが、眠ってしまった自分をベッドまで運んでくれたのだろうけれど。

「ラオヴァルト……？」

部屋の中を見渡して執事の姿を探すと、カーペットの上に横たわり眠るラオヴァルトの姿があった。

エティシラは思わず彼の元へ寄り、息を潜めてその寝顔を見入ってしまう。

必ず自分より遅く就寝し、まだ自分より早く起床する執事の寝顔はかなり貴重なものだから。

だんだんと眠気が離れ、エティシラは昨日のことを鮮明に思い出す。

半径五メートル以内に近づくな　　と言っておきながら、嵐に怯

えて、泣きながらラオヴァルトにしがみついたこと。

ラオヴァルトはそんな自分に怒ったりせず、優しく抱きしめてくれたこと。

それから、

『……あなたが落ち着くまで、ずっとこうしています。俺が付いています。だから、どうか安心してお眠りください』

ラオヴァルトのあの言葉。

様々なことを思い出してゆくうちに、エティシラの頬は赤く染まる。

青藍色の瞳を嵌めた、整った顔がまっすぐに自分に向けられていた。

そばにいて、と一言命令すれば、眠るまでずっとそばにいてくれた。

「……ラオヴァルト」

エティシラは小さく呟いた。

ラオヴァルトはまだ目を覚まさなかったが、彼女はそのまま続ける。

「ありがとう」

消え入ってしまいそうなほど、小さな小さな声で。

しかし、それは眠っているはずのラオヴァルトの耳に届いていたのか。

「……ん……」

ラオヴァルトは小さく唸り、ゆっくりと目を開いた。

「っ！」

突然現れた青藍色の瞳に、エティシラはびくっと肩を上げ、露骨にうろたえる。

「お、お、お、起きたのね」

「姫様……。結局、俺もこの部屋で眠ってしまいました。すみません、すぐに執事部屋へ戻ります」

ラオヴァルトにしては珍しく焦った様子で、すぐに立ち上がって身を正した。

エティシラの父と母は、もうすぐ帰ってくるはずだ。

姫の部屋で眠ってしまったところを見られては、彼にとっても示しがつかないのだろう。

「……今日はなるべく暖かい格好をしてなさいよ。一晩中毛布もかけずに寝てたんだから、身体冷やしてる……でしょ」

まるで母のような言葉で、エティシラは部屋を出ようとしたラオヴァルトを引き止める。

「ありがとうございます、姫様」

ラオヴァルトは一度振り返って微笑むと、「失礼します」と頭を下げて部屋を出ていった。

## 第七話

「エティシラ様、朝ですよ。起きてください」

その日の朝、眠りに付いていたエティシラはラオヴァルトではなく馴染みの侍女に起こされた。

午前八時。

いつもと全く同じ時刻に目が覚めたと云うのに、なんだかあまり良い目覚めではなかった。

ラオヴァルトは今日、宮廷内にいない。

父からの申し付けで、エティシラの生活用品や衣類の買い出しへ行ってしまったのだ。

昨日の晩に出発した彼は、今日の深夜に帰ってくるらしい。

「暇だわ……」

寝癖で絡まった髪を梳かしながら、エティシラは声を漏らす。

普段はラオヴァルトにハーブティーでも淹れてもらって、退屈を凌いでいた。

別にハーブティーくらいそこら中にいる侍女だつて淹れることはできるが、なぜか頼もうと云う気にはならなかった。何なら自分で淹れてもいいのだが、やはりその気にもならない。

「ねえ、何か面白い話とかないかしら。暇で仕方が無いわ」

ようやく髪の絡みが解けたエティシラは、せつせと室内を掃除している一人の侍女に声をかけた。

「面白い話、ですか。うーん、姫様のお話相手は、いつもブルーノ様やラオヴァルト様が任されてきましたからねえ……」

長身のその侍女は、モップを動かしていた手を止めて悩み始める。そしてしばらくしてから、何かを閃いたらしく瞳を輝かせてみせた。

「これ、友人から聞いた話なんです。むかーしむかし、ある国に、一人の少女がいました」

お伽話を語るような口調で、侍女は話します。

「少女は十六歳になったとき、国の王子様の召使めしつかいとして働き始めます。王子様はとても美しく、様々な国の姫から求愛された素敵な方でした。いつしか少女も、美しい王子様に恋心を抱くようになりました」

エティシラが小さく頷いたのを確認し、侍女は続けた。

「やがて王子様も、その少女に恋をします。王子様を選んだのは、どこかのご令嬢や姫君でもなく 召使いの少女だったんです」

「へええ、なんだか素敵な話じゃない」

エティシラはそう言っではにかなだ。

そんな彼女に、侍女は「お話はまだ終わっていないんですよ」と言っ続けてる。

「相思相愛になった二人ですが、二人にはあまりにも大きな身分の違いがありました。国を背負うべき王子と、あまり暮らしも豊かではない召使い。当然、周囲の者は二人の恋に反対します」

「まあ、そうよね」

「それでも二人は、周りの者など関係なく、強く惹かれあっています。ですがあるとき、二人を見かねた国王様が……」

ここで侍女は一度話を止める。

「何よ、早く話の続きを聞かせてちょうだい」

「ここで姫様に質問です。この後、国王様はどんな行動に出たと思いますか？」

話の続きをせがむエティシラに、侍女は質問を投げかけた。まるで、どこかの先生のような物言いだ。

「そ、そんなのわからないわよ。ふ……二人をこっぴどく叱ったとか？」

「いいえ。 国王様は、家来の者に召使いの少女を殺させてしまつたんです」

侍女によって放たれた衝撃的な答えに、エティシラの表情がこわばる。

「王子と召使いの恋は、何が何でも許されなかつたんです。少女の死は、表向きは病死と云うことにされました。王子も少女は病死したのだと思い込み、彼女の死をひどく嘆き悲しみました。ですが、その後他国の姫と結婚してしまいました」

「……終わり？」

エティシラは、継るように侍女に問うた。

「はい。これで物語は終わりです」

「……」

……面白い話ではあつたが、とても悲しい話だつた。

禁断の恋をした二人に待っていたのは、悲しい結末。

エティシラは自分まで落ち込んでしまい、浮かない表情で俯いた。「ハッピーエンドじゃないのね。……そのお話、結局何が言いたいのかしら」

「身分が違う者同士による“禁断の恋”に、ハッピーエンドは待っていないと云うことではないでしょうか」

悲しげもなく、侍女は淡々と述べる。

「どんなに願っても、身分が違う者どうしの恋は決して許されない、と……。……エティシラ様も」

「え？」

「エティシラ様も、気をつけてください。ラオヴァルト様とのこと、人にバレたら大変なことになるかもしれませぬ」

口では心配そうに言っていたが、侍女はにっこり笑っていた。

「き……気をつけるも何も、私とラオヴァルトはその物語の二人みたいな関係じゃないわよ。ただの主人と執事だもの」

エティシラは腕を組んで、侍女の視線から逃げるようにふいつとそっぽを向く。

きつと自分は、いずれどこかの王子と結婚させられるのだろう。そしてそれは、あまり遠くはない未来の話で。

ラオヴァルトも、いつかはどこかの娘と恋に堕ちるのだ。

今だって侍女たちに「格好良い」などと騒がれているのだから、相手ならたくさんいるはずだ。

「……私とラオヴァルトは、恋仲になつたりなんてしないわ」

確かめるように呟きながら、エティシラは嵐の夜のラオヴァルトの言葉を思い出す。

『俺は執事として、あなたにこれ以上のことはしません。絶対に』

彼も言っているように、自分たちはこれ以上にもこれ以下にもならない。

“主人と執事”以上の関係になることなど、ありえないのだ。

そう自分に言い聞かせつつも、エティシラの頭からは侍女の話が一向に離れなかった。



## 第八話

「わあっ！ あのブローチ、とってもかわいいわー！」

「姫様」

「それから、あの水色のワンピースも欲しいわね。色が私の理想通りなの」

「姫様」

「このスカーフも、ひらひらのレースがついてて素敵ね」

「エティシラ姫様」

笑顔ではしゃぎ回っていたエティシラは、ラオヴァルトの何度目かの呼びかけに漸く足を止めた。

「何よ、ラオヴァルト」

「……何よじゃありません。すみませんが、そろそろお買い物は終わりにしていただけませんか。重すぎてそろそろ限界です」

ラオヴァルトは長い溜息を吐き、力を込めて両腕を持ち上げる。

その腕には三十個近くの紙袋が提げられていた。

宮廷から、少し離れた場所にある歓楽街。

可愛い服やアクセサリーの店をたくさん備えたこの街は、エティシラにとってお気に入りの場所だった。

けれど ガラの悪い人間もいないし、危険な物だって売っていないのに、心配性の父はこの街へ出かけることを「危険だ」と頑なに反対した。

それでも、エティシラだって姫とは云え年頃の娘。

前々からブルーノを荷物持ちとして連れては、内緒で宮廷を抜けだして街へ遊びに行ったものだ。

そして今日、街へ繰り出した際の「荷物持ち」の役割がラオヴァルトにも回ってきた。

「えー？ あと二時間はお買い物したいわ。ブローチもワンピースもスカートも欲しいし」

「却下です。そろそろ腕の感覚が失くなってきました」

「何よ、男のくせに情けないわね」

そう言つて、エティシラは肩をすくめる。

ラオヴァルトはにこりと笑つて、紙袋を三つほどエティシラの前に差し出した。

「それでは姫様、試しに持ってみますか？」

「う……いいわよ、それは遠慮しておく」

その気になればあと一週間この街に居続けることだってできたが、そんなことをしたらラオヴァルトはついに疲労で倒れてしまつたろう。

まだ名残惜しさはあつたが、エティシラは宮廷へ戻ることにした。

「それにしても姫様、こんなにたくさん……一体何を買ったんですか」

「えつとねえ、ドレスとかブラウスとかスカートとかリボンとか」

「それ、本当に全部使つんですか？」

「ちよつと、ラオヴァルトまでお母様やブルーノみたいなのを言わないでよね」

ラオヴァルトの言葉に少し焦りつつも、エティシラは堂々と言い放つた。

自分で買つておいたくせに、結局使わないと云うのはエティシラがよくやってしまう悪い癖だった。

何度、母やブルーノに叱られたことか。

「……買う前はすぐ欲しいって思うのよ。だけど、いざ手に入ると、もうそれで満足しちゃうの」

ぼつりと呟くと、ラオヴァルトはなぜかふつと笑つた。

「姫様は、独占欲が強いんですかね」

「独占欲と買い物話に、何の関係があるのよ……」

「いいえ、別に」

ラオヴァルトは妙に意味深な発言をしたと思ったら、また、先刻のように紙袋を何個かエティシラの前に差し出した。

「なに？」

「姫様、一度でいいから持ってみてください」

「だ、だからさっき嫌だって言ったでしょ。いやよ、そんな重そうなもの」

「その“重そう”なものを、俺はずっと持ってたんですよ。ぜひ俺の苦勞を体感してください」

ラオヴァルトは、妙に楽しげな笑顔を浮かべる。

「そんなの体感したくないわ!」

見るからに相当重そうな荷物を押し付けてくるラオヴァルトに、エティシラは走って逃げ出した。

しかし、大荷物を抱えているとはいえさすがは男の足。

ラオヴァルトはあっさり彼女に追いつき、「さあ、どうぞ」と無理に紙袋を彼女の手を持たせた。

「……はあ、はあ……全くもう、あんたって本当サディスティックよね!」

息を切らしながら、エティシラはその紙袋を持ち上げる。

まるで何かの罰を受けているようだ。

直後、

「え? ちょっと……何、これ……、っきゃあああ!」

もごもごと声を上げ、エティシラはその場につまずいて膝を擦りむいた。

「いたたたた……」

「大丈夫ですか、姫様。どうして何もないうちで転んだんでしょうね」

まったく心配していない顔のラオヴァルトに、エティシラは涙目になって訴えかける。

「あなたがこんな重いモノを持たせるから、バランス感覚を失ったのよ！」

最も、ラオヴァルトはこれを長時間　いや、これよりずっと多くの紙袋を持たされていたのだが。

「まあ……姫様はずっと運動なんてして来なかった訳だし、無理もないですね。ご無理をさせてしまって申し訳ございませんでした、姫様」

「分かればいいのよ、分かれば……ううっ、痛い」

周りの目も憚<sup>はば</sup>らず、エティシラはその場にしゃがみこむ。

「……」

ラオヴァルトは何かを考え込んでいるようで、彼女の前に屈み込むと尋ねた。

「怪我をしたのは膝ですか？」

「そうだけど……」

「そうですか。では失礼します」

「?……!!?!??」

そのとき、エティシラは声にならない叫び声を上げた。

ラオヴァルトは、ごく自然な動きで、エティシラのドレスのスカート部分をめくったのだ。

「な、な、ラオヴァルト、あ、な、なにを」

「何動揺しているんですか、姫様。俺はあなたの傷口を見たかっただけです。血が出る前にこうしておかないと、せっかくのドレスに血が染みてしまいますし」

真っ赤になるエティシラに、ラオヴァルトは無表情で告げる。

「だ……だから、って!!　それはレディーに対する態度なの!？」

「……レディー？」

ラオヴァルトは、血が出ている膝から彼女の顔へと視線を移す。

「なんでちょっと笑うのよ!!」

本当に本当に本当に失礼な執事だ。

エティシラは心の中で、無配慮な執事へと悪態をつきまくる。

しかしここで、ラオヴァルトは更にとんでもない行動に出た。

「……始めに言っておきますが、怒らないでください」

まるで敬意を込めて手にするそれみたいに、ためらいもなくエティシラの膝へと口づけたのだ。

「なななななななな……!!!!!!」

エティシラのうるたえつぶりは先程より更にヒートアップし、その顔もますます赤くなる。

「もう一度言いますが、怒らないでください。消毒をしているんです」

ラオヴァルトの舌が膝を抉り、ぴりつとした痛みをエティシラは感じる。

それからラオヴァルトはすぐに口を離し、どこからか取り出したガーゼで膝元を抑えた。

そして手馴れた手つきで手当てを始める。

「……」

なんだかもう平常な気持ちでいられないのだが、とりあえずお礼を言つべきだと思った。

「あ、りがとう」

「いえ」

エティシラが小さくつぶやくと、ラオヴァルトは小さく笑って首を横に振った。

……とんでもない執事だ。

エティシラはすっかり気疲れしてしまい、ふらふらと立ち上がってラオヴァルトと共に歩き出した。

## 第九話

ラオヴァルトには謎が多かった。

彼の名前はラオヴァルトⅡデリウス。

前執事、ブルーノⅡデリウスの孫息子。

漆黒の髪に、サファイアのような青藍色の瞳が印象的な、役者のように整った麗しい風貌を持つ。

思えば、エティシラの知る彼のデータはそれだけしかなかったのだ。

「あんたって、秘密主義なの？」

「は？」

午後八時過ぎ。

部屋へ豪華な朝食を運んできたラオヴァルトに、エティシラがふと言葉を投げかけると、思い切り怪訝そうな表情で返された。

「だから、あんたは秘密主義なのかって聞いているのよ？ ていうか、そうなのよね？ 私、ラオヴァルトについて知ってることなんて全然ないもの」

「秘密主義と言うか……俺について、姫様にいちいちお教えする必要もないかなと思ひまして」

「教える必要があるわよ。私、もっとラオヴァルトのことを知りたいもの」

エティシラは腕を組み、背の高い執事を見上げる。

ブルーノのことはもっとよく知っていた。

十月一日生まれで、今年で六十七歳。趣味はゴルフで、好きな食べ物は何しブドウで。

「俺の……」

漏らすようにぼつりと呟くと、ラオヴァルトは言い聞かせるよう

にエティシラへ顔を近づける。

「俺のことについて知っても、あまり良いことはありません。ですから、今は姫様は何も知らなくて良いんです」

拒絶するその表情は穏やかで、まるで駄々をこねる子供をなだめて  
いるよう。

けれど同時に、どこか苦痛の色が滲んでいる。  
悔やんでいるような、悲しんでいるような……。

「……そう」

あまりにラオヴァルトが真剣な様子だったので、エティシラは彼の瞳から目を逸らす。

今は、何も知らなくて良い。

と云うことは、いずれ知ることが来るのだろうか。

「とりあえず、俺は姫様よりは年上ですよ」

「そんなの言われなくて分かってるわよ。じゃあ……、好きな食べ物は何？ これくらいはいいでしょう」

「好きな食べ物ですか？ そんなことを聞いてどうするんです、まるでどこかの子供みたいですよ」

馬鹿にしたようにラオヴァルトが嘲笑するので、エティシラはムキになって拳を作った手を上下に振る。

「なっ……、うるさいわね！ いいじゃないっ、それくらい教えてくれたって！」

「……そうですね……」

少しの間考えこむような仕草をして、ラオヴァルトは言った。

「ミルククッキーです」

「ミルククッキー？」

らしくないと云うか、庶民的と云うか、親しみがあると云うか、

可愛らしいと云うか

何はともあれ予想外の答えに、エティシラは目を見張る。

「ミルククッキーって……甘ったるくて小さいアレのことよね？」

「それ以外にありませんが　って、何笑ってるんですか」

こらえきれないと云った様子で、肩を震わせるエティシラを指摘するラオヴァルト。

「ふふふっ、ラオヴァルトにも可愛いところがあるのね」

「姫様。せつかくのお言葉ですが、あまり嬉しくないです」

ラオヴァルトは微妙な表情だったが、エティシラはまだ笑い続けていた。

けれどその最中にも、先刻の彼の言葉が頭に浮かぶ。

穏やかであると同時に、苦痛を示すあの表情とワンセットで。

『　俺のことについて知っても、あまり良いことはありません。

ですから、今は姫様は何も知らなくて良いんです』

あの時ばかりは、いつもと違い余裕がなさそうに見えた。

朝食をテーブルに並べ終え、部屋を出ようとしたラオヴァルトは途中でぴたりと足を止めた。

「そっいえば　姫様、今夜の支度はもうお済みでしょうか」

今夜の支度。

今夜と云えば、二ヶ月に一度の恒例のイベントがある。

忘れていた訳ではなかったが、きまりの悪いエティシラはラオヴァルトとは視線を合わせずに言い放った。

「……まだよ。どのドレスを着ていくか迷いに迷ったけれど、結局決められなかったの」

今夜、ベルリガ王国の宮廷では舞踏会が行われるのだ　。



## 第十話

ベルリガ帝国の宮廷で二ヶ月に一度行われる舞踏会は、毎回大いに盛り上がっている。

宮廷内に備えられた大きなホールに、どこかの令嬢とか御曹司とか公爵とか　とにかく沢山の人が、招待されて来るのだ。

だからエティシラは、ただひとりの姫君として、他の娘たちに劣ること無く誰よりも目立っていなくてはならない。

誰よりも高く美しいドレスとアクセサリーで身を包み、招かれた者たち全員の視線を一気に集めるほどに煌びやかでいなくてはならない。

そのことがエティシラにとっては少なからずプレッシャーになっており、どのドレスを着るかと言うことさえも安易には決められなかった。

六時から始まる舞踏会を目前にした、午後五時過ぎ。

「姫様、お手をどうぞ」

白い手袋をはめた手が、煌びやかに着飾ったエティシラへまっすぐに差し出される。

エティシラが戸惑いがちにそれを取ると、ラオヴァルトは優しく微笑んだ。

「そのドレス、やっぱりよくお似合いです」

「……そうかしら」

結局どのドレスにするかを自分では決められなかったエティシラは、ラオヴァルトの判断に委ねることにした。

長時間をかけて、何十枚ものドレスを着てみせて　あるドレスを着用した時、今まで曖昧にしか反応しなかったラオヴァルトがよ

うやく、手応えのある反応を示した。

「姫様にはこれが一番お似合いです」

それは、明るい紺色の単調なドレスだった。

ラオヴァルトの瞳とよく似た美しい色ではあるが、極めてシンプルなデザイン一枚。

けれどラオヴァルトは「シンプルなデザインのものこそ、姫様の高貴さが際立つものです。アクセサリーも埋もれずに目立ちます」と推していたので、これにすることに決めたのだ。

「舞踏会には、あんたも参加するんでしょ。侍女たちが楽しみにしていたわ」

「俺はあくまでも姫様の付き人ですから、参加するつもりはなかったのですが……。一応ダンスは覚えているので、人数合わせにと」

ラオヴァルトは遠慮がちに言ったが、舞踏会に彼の姿を見つけた侍女たちはきつと狂喜乱舞することだろう。

エティシラには、侍女たちの喜ぶ顔が目に見えてくるようだった。今回の舞踏会には使用人たちも参加する。

だから侍女たちが、「ラオヴァルト様は御参加されるのかしら」と噂話に花を咲かせていたのをエティシラはよく知っている。

「ラオヴァルトも大変ね、色んな女の好意を一身に背負って」

「は？ 何のお話ですか？」

「なんでもないわよ」

小さくつぶやき、エティシラはラオヴァルトと共に部屋を出てホールへと向かった。

「あの方が、エティシラ姫様の執事ですの？ たしか名前は  
「ラオヴァルト」デリウス様よ。なんて凜とした佇まいなのかしら」  
「端正な顔立ち……。ああ、目が眩むほどに素敵なお方。一度でい  
いからお話をしてみたいわ」

ホールに入るなり、話題の中心になったのはエティシラ。では  
なく、その隣で彼女をエスコートしているラオヴァルトだった。  
侍女たちはもちろん、彼を初めて見た令嬢たちもわずかに頬を染  
めてひそひそと言葉を紡いでいる。

これでは、他の男たちの立場がなくて可哀想な気もする。

「……………」  
エティシラは複雑な思いのまま、ゆっくりとラオヴァルトから手  
を離した。

「姫様？」

「好きなどころへ行ってきていいわよ。あんたと踊りたいって女、  
ここに有り余るくらいにいるんだから」

じつとこちらを見つめている女たちに視線を投げ、エティシラは  
笑ってみせた。

「……………」

「あ、あのっ、ラオヴァルト様！」

ラオヴァルトは反論しようとしていたようだが、その声を遮って、  
一人の女が彼の元に近づいてきた。

「わたしと、少しで良いのでお話してください！」

姫の前だと云うのにやたらと積極的な彼女は、ラオヴァルトをじ  
つと見つめる。

「いや、俺は……………」

ラオヴァルトは困惑気味だったが、そんなことはお構いなしだ。

「マルガレータ嬢、ずるーい！ 私もその方とお話ししたいわ」

「ラオヴァルト様、いつから姫様に仕え始めたんですか？ ご出身

はどちらで？」

次々とホール内の女たちがラオヴァルトへと駆け寄り、輪のように彼を囲む。

エティシラはどんどん数を増してゆくその輪を、少し離れた場所で見つめる。

「あーあ、ニヤニヤしちゃって。何よ、馬鹿執事のくせに、ちょっと騒がれたからって良い気になって」

誰も聞いていないのいいことに、思い切り毒づいた。

ラオヴァルトの方をちらりと見たが、その姿は多数の女たちによって隠されており、その表情は何えない。

たしかにラオヴァルトは整った風貌をしているし、身のこなしだつてとても優雅だけれど。

騒いでいる女たちは何も知らない。

彼が実はとんでもない性格だつてことも。

秘密主義らしい彼について知っていることはごくわずかだけれど、それでも、宮廷内で彼について一番よく知っているのはエティシラだ。

……あんたたちなんて、ラオヴァルトのことを何も知らないくせに。

ラオヴァルトはね、わたしの執事なのよ。

あいつのことを一番よく知っているのは、わたしなんだから。

このドレスだって、あいつが褒めてくれたんだから。

わたしは、あいつと二人で色んなところに行って行ったのよ。

なぜか悔しい気持ちになって、エティシラは心の中で彼女たちに罵声を浴びせる。

だがすぐに、無邪気に騒いでいる女たちに対抗意識を燃やすなど、姫としてどうなのだ、と自己嫌悪に陥った。

ここにブルーノがいたら、きっと叱られているだろう。

エティシラはこのときになって、突然思い出した。

「いつか侍女が話していた、王子と召使いの少女の“禁断の恋”の話。」

どんなに強く愛し合っていても、かなわなくて。

召使いは国王の命令によって殺され、王子はその後違う女と結婚してしまった……。

どうして今急に思い出したかなんて、自分でも分からないけれど。

その時。

「……………あ？」

扉の前に佇む見慣れた人影がふと視界に飛び込み、エティシラは怪しげに声を漏らした。

あまり高くない背丈に、白髪混じりの頭髪。

濃緑色の瞳。

それは、人生の大半を共に過ごしてきた者の姿だった。

「ブルーノ！ ブルーノね！」

エティシラは大きく声を上げると、ドレスの裾を持ち上げて扉の方へと駆け出した。

## 第十一話

扉の前に佇んでいる男性。

あれは紛れも無いブルーノの姿だ。

彼が姿を消してからそう長い時は経っていないはずなのに、何十年ぶりに会うかのように懐かしい気持ち。

一体何から話そう。

突然いなくなったことについて、思う存分文句を言ってやろうか。

彼のもとへ走ってゆきながら、エティシラの表情は自然と綻ぶ。

「やあ、ラオヴァルト」

しかし、ブルーノはエティシラ存在には気づかずに、女たちに囲まれているラオヴァルトへと真っ先に声をかけた。

「おじいさま……?」

ブルーノの突然の表情に、ラオヴァルトは驚いた表情をする。

「暇が出来たので、宮廷へ足を運んだんだ。ちょうどお前さんに話もあつたからな」

「話?」

「ああ。とても大事な話なのだよ、ちょっとここでは話にくいのだが……」

「分かりました。それでは、ホールの外で……」

ブルーノとラオヴァルトは小さく声を連ね、そのままあっさりとホールを出てしまった。

「やだあ、行っちゃった」

ラオヴァルトがいなくなり、女たちは一斉にがっくりと肩を落とす。

「……?」

会話の内容は聞き取れなかったが、二人が肩を並べてホールを出

たのは、エティシラのいる場所からしつかりと見えた。

どうしたのだろう。

疑問に思ったエティシラは、二人を追ってホールの外へ出ることにした。

「ブルーノ？ ラオヴァルト……？」

少し重い扉をこじ開けて、ホールの外へ出たエティシラ。

しかし、そこには二人の姿はなかった。

追ってきたのが遅すぎたのだろうか。

けれど二人がどこに行ったのか、まったく予想のつかないエティシラは困り果てていた。

「……」

暫しの間そこに立ち尽くした後、エティシラは仕方なくホールへ戻ることを決めたのだが

「おじいさま」

ふと響いた聞きなれた声に、歩みだした足を止めた。

「！」

独特の透明感のある声。

それは確かに執事、ラオヴァルトのものだった。

エティシラは足音を忍ばせて、その声の聞こえてくる方へと歩み寄った。

そしてようやく廊下に二人の姿を見つけ、エティシラは壁にこっそりと隠れて二人の話に耳を傾ける。

「おじいさま、お話とは一体？」

「うむ……」

ラオヴァルトの問いに、ブルーノは少しの間を置いてから返事をした。

「お前に、見合い話 coming いる」

「！」

何の言葉も出ない代わりに、エティシラの心臓が一度大きく跳ね上がった。

「先方の家柄はそう悪くないぞ。私としても、お前にはそろそろ結婚をしてもらいたい」

「……」

「執事を辞めるとは言わない。お前にとっても悪い話ではないと思うのだが……」

感情の読めないブルーノの声。

ラオヴァルトは無言だった。

ラオヴァルトが見合いをする。

他の女と結婚をする。

その微笑みを、その手を、他の女に

どくどくと胸が高鳴る。

痛いほどに大きく、苦しく。

どろどろとした感情が流れ込む。

何かの振動のように全身が小刻みに震えてしまう。

「姫様！」

そのとき、エティシラ存在に気づき 声を上げたのは、ラオヴァルトだった。

「……」

彼と目を合わせることができず、エティシラは俯く。

エティシラの嫌な鼓動だけが響く、沈黙が流れていた。



## 第十二話

「エティシラ姫様……。お久しぶりです」

ブルーノもエティシラの存在に気づき、深々と頭を下げる。

エティシラは何の言葉も返すことが出来なかった。

さっきまで、ブルーノに話したいことは山ほどあったはずなのに、どうしてか、それらはすべて頭の中から消えてしまった。

ラオヴァルトが、見合いをする。

たった今知ったその事実が、蔓つるのようにこの心を絞めつけている。

「……………」

何か、言わなくちゃ。

何でもいいから、返さなくちゃ。

いつもみたいに 笑顔で。

「ひさ……………」

久しぶりね。

言いかけたその言葉は、途中で途切れてしまった。

自然と溢れ出した涙が、最後まで言葉を紡ぐのを許さなかったのだ。

「姫様！」

その驚いた言葉は、ブルーノとラオヴァルト どちらのものであったのか。

エティシラは涙を流したまま、踵かかとを返して彼らの前から走り去っていった。

「はあ、はあ……………はあ……………」  
かなり長い距離を走ってきたエティシラは、息を切らしてその場に座り込んだ。

二人の執事から逃げるようにしてやって来たのは、誰もいない真っ暗な屋根裏部屋。

ここなら誰にも見つからないと思ったからだ。

ラオヴァルトが他の女のものになる。

その微笑を、他の女に向けて。

その腕で、他の女を抱きしめて。

その唇で、他の女に優しくキスをするのだろうか

嫉妬としか云いようのない爛れた感情が、エティシラの心に流れ込む。  
ただ。

同時に、止めようもない悲しみと寂しさも流れこんできた。

わたしは何を寂しがっているの？

ラオヴァルトは結婚しても、わたしの執事を辞めるわけではない。今までと同じように、わたしの命令なら何でも聞いてくれるはずだ。

他に、愛する女がいながらも……………きっと、今までとは何ら変わらない対応で。

ラオヴァルトだって、わたしの執事ではあれど一人の男なのだ。

誰か他の女と恋に落ちて、そして結婚をすることだってあるに決まっている。

頭では、そうわかっていたけれど。

エティシラは溢れ出す涙を止める術を知らなかった。

あの優しい微笑みも、わたしを抱きしめた強い腕も。癖のある性格も、あの無礼なところも。ミルククッキーが好きだと言っていたことも。

わたししか知らなかった彼の一部はやがて他の女も共有するものとなり、ついには彼について一番知っている女はわたしではなくなる。

自分ではない別の女が、彼の特別な存在になる。

エティシラはそれがたまらなく嫌だった。

息苦しくさえなりそうな鼓動も止まらない涙も、そのことに強く嫌悪感を示していた。

自分のみが知る彼の一部を、独占したい。

他の女に知られたくない。

ラオヴァルトが、他の女のものになってほしくない。

他の女と恋になど落ちてほしくない。

醜い感情を抱いているとわかつているけれど、それでも止められない思い。

「……………わたしは」

わたしは、ラオヴァルトのことを……………。

「……………」

エティシラは、自身を支配する感情を断ち切るようにして、首を激しく横に降った。

涙を乱暴に拭い、強く目を瞑る。

それでも

「王子と召使いの恋は、何が何でも許されなかったんです。少女の死は、表向きは病死と云うことにされました。王子も少女は病死し

たのだと思ひ込み、彼女の死をひどく嘆き悲しみました。ですが、その後他国の姫と結婚してしまいました』

侍女から聞いたあの話は、どうしても心に残ったままで消えてはくれなかった。

目を僅かに腫らして無我夢中で辿り着いたのは、何百冊もの本が並ぶ図書室だった。

別に勉強がしたい訳ではない。

けれど、いつまでも屋根裏部屋にいる訳にはいかなかったし、かと言って部屋に戻っては恐らくラオヴァルトが待っている。

……泣いたまま走り去ってしまった手前、エティシラはまだ彼とは会いたくなかった。

「……………」

幸い、うるさい先生　否、アニも今日はここにいない。

エティシラは本棚と本棚の間を立ち歩き、ひとつの本の前で立ち止まった。

この前も読んだ、我が国ベルリガ帝国の歴史についての本だ。

歴史自体は大嫌いだが、近代のこの国の歴史については、姫として少しくらいは頭に入れておきたい。

少し前まで、他国を滅ぼしてばかりで過激だったベルリガ帝国。

ベルリガ帝国に滅ぼされた国のひとつ、「レイホルム帝国」。

それは本当につき最近まで存在していた国で、とても栄えていたと云う。

本を手にとって読み、改めて近代の歴史を復習し、エティシラは

ふと疑問に思う。

ベルリガ帝国によって滅ぼされた国に住んでいた人々は、どんな気持ちでいるのだろうか。

特にレイホルム帝国は失くなったのが最近のことなのだから、かつてレイホルム帝国に住んでいた人々は今も生きているはずだ。

無論、家族や大切なものを失ってしまった者も。

この国についてどんな思いを抱いているのだろうか。

この 「鬼の国」とさえ云われる、ベルリガ帝国について……。

「 姫様」

いつもより少し焦りが含まれているような声は、卒然と図書室に響いた。

「 エティシラは言葉も無く、驚いて顔を上げる。

「 ここにいたんですね。……探したんですよ」

目の前には息を切らしたラオヴァルトが立っており、その表情は怒っているように感じられた。

睨むように鋭い瞳を向けられ、エティシラの身体は自然と硬直してしまふ。

今は話をしたくなかった。

顔だつて合わせたくなかった。

逃げなきゃ。

心では強くそう叫んでいるのに、エティシラは金縛りにあったかのように動くことができない。

「……………」

そのままゆっくりと歩み寄ってきたラオヴァルトは、エティシラにぐっと顔を近づける。

ようやく動けるようになり、エティシラは後退りをしたが、あ  
えなく後頭部を本棚にぶつけてしまい、同時に持っていた本を床に  
落としてしまった。

素速く逃げてしまえばよかったのだが、ラオヴァルトはそれを読  
んでいたようで、本棚に手をやりエティシラが逃げるのを阻止して  
いた。

逃げられない。

少しずつ穏やかになりつつあったエティシラの心臓は、また鼓動  
を刻み始める。

「……こつちを、見てください」

俯いていると、まっすぐに自分を見つめるラオヴァルトがそつと  
囁いた。

「……………」

拒絶など許されていないような気がして、エティシラはゆっくり  
と顔を上げた。

揺らぎのない、青藍色の瞳と視線が合った途端  
ラオヴァルトは、小さな声で切り出した。

「姫様に、お話があります」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2485ba/>

---

青藍執事の秘密

2012年1月14日11時49分発行